

令和 4 年 4 月 8 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01073

研究課題名(和文) 古典期のマケドニア王国の権力者崇拜に関する研究：フィリポス2世の治世を中心に

研究課題名(英文) A Study on the Development of the Ruler Cult in Macedonia during the Classical Period

研究代表者

澤田 典子 (Sawada, Noriko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：50311650

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、マケドニア王フィリポス2世の「神格化」に焦点を当て、彼をギリシア世界の権力者崇拜の文脈に位置づけることを試みた。フィリポス2世は晩年にいくつかのギリシア諸都市から宗教性を帯びた大きな栄誉を受けたのみならず、その最晩年には、自身と家族を神々と肩を並べる存在として宗教的なコンテクストに位置づけ、ヘレニズム時代の王朝祭祀へと発展していく方向性を示したことを検証し、ギリシア世界の権力者崇拜の発展における彼の歴史的意義を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヘレニズム時代の君主礼拝やローマ皇帝礼拝の起源とされるアレクサンドロスの神格化は、人間を礼拝や祭祀の対象とする権力者崇拜という慣行の研究においてとりわけ関心を集めてきたが、彼以前の時代における権力者崇拜はいまだ十分に研究されていない。古典期のマケドニア史の文脈においてフィリポス2世の「神格化」を検討する本研究は、そうした研究の空白を埋めるものであり、また、支配者の権力の神聖化という普遍的なテーマの探究により、他の時代や地域をも視野に入れた学際的な研究の可能性を提示している。

研究成果の概要(英文)：In this study, I focused on the 'deification' of Philip II of Macedon, with the purpose of placing him within the proper context of the ruler cult in the Greek world. Philip was accorded great honours of a religious nature in his relations with a few Greek cities towards the end of his reign. Furthermore, he elevated himself and his own family to a somewhat semi-divine status in the last year of his life, thereby foreshadowing later developments of the Hellenistic dynastic cult. In this respect, Philip can be regarded as a key figure in the history of the ruler cult in the Classical and Hellenistic Greek world.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：マケドニア 権力者崇拜 都市祭祀 王朝祭祀 自己神化 フィリポス2世 アレクサンドロス ギリシア世界

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

ヘレニズム時代の君主礼拝やローマ皇帝礼拝の起源とされるアレクサンドロスの「神格化」は、膨大な蓄積を有するアレクサンドロス研究のなかでもとりわけ研究者の関心を集めてきたトピックであり、人間を神的な崇拝の対象にする権力者崇拝という慣行の発展においてアレクサンドロスの治世を大きな転換点ととらえるのは、ほぼ定説となっている。しかし、そうした発展過程において、アレクサンドロスはいかなる意味で転換点となったのか、ギリシア世界の権力者崇拝は彼を境にどのように変わったのかは必ずしも明らかではなく、アレクサンドロス以前のギリシア世界における権力者崇拝は、史料不足もあいまって、いまだ十分に研究されていない。アレクサンドロス以前のギリシア世界において生前に神的崇拝を受けたことがほぼ確実視される唯一の人物は、前5世紀末のスパルタの将軍リュサンドロスであるが、彼が生前の神的崇拝の「先駆」であったとすると、アレクサンドロスまで約70年もの空白があったことになる。そこで、こうした空白を埋めるために考察すべきなのが、アレクサンドロスの「神格化」の直接の「前例」とも目される、父フィリポス2世（在位：前360/59～前336年）の事例である。

欧米では、1970年代からマケドニア史研究全体のこれまでにない活況ともなっており、フィリポス2世研究が著しい進展を見せており、フィリポス2世とアレクサンドロスの父子関係に焦点を当てた研究も多く、志半ばにして急死したフィリポス2世は最終的に何をめざしていたのか、アレクサンドロスは父の計画から何を受け継いだのか、という問題も様々に論じられている。フィリポス2世の「神格化」は、単にアレクサンドロスの「前例」「先駆」であったか否かという問題にとどまらず、アレクサンドロスの「神格化」やヘレニズム時代の君主礼拝という大きな問題を再考する一助となるとともに、両者の父子関係や、フィリポス2世の最終計画にも関わる極めて重要なテーマである。しかし、フィリポス2世の「神格化」をめぐるのは、これまでの研究の関心は、彼がアレクサンドロスと同様の神的崇拝を受けたか、彼をアレクサンドロスの「神格化」の「先駆」と見なすのか、という点にほぼ限定されており、近年活況を呈しているフィリポス2世研究のなかでもいまだ十分に議論されていない。さらに、ギリシア世界における権力者崇拝の発展過程にフィリポス2世をいかに位置づけるべきかという考察も不十分である。そこで本研究では、ギリシア世界の権力者崇拝の文脈にフィリポス2世を位置づけ、権力者崇拝の発展における彼の歴史的意義を明らかにすることをめざした。

## 2. 研究の目的

本研究は、フィリポス2世の「神格化」に関わる個々の事例を、諸都市が彼に神的崇拝を捧げたとされる事例（ギリシアポリスの都市祭祀の伝統に属する事例）、彼自身が自己神化を志向していたことを示すとされる事例（ヘレニズム時代の王朝祭祀の方向性を含む事例）に分けてきめ細かく検討し、それらを踏まえて、権力者崇拝の発展におけるフィリポス2世の歴史的意義を明らかにすることを目的とした。こうした検討を通して、マケドニア史における以下の重要な課題に取り組むことをめざした。(1)フィリポス2世のギリシア征服と最終計画において、「神格化」という現象はどのような意味を持っていたのか。(2)フィリポス2世はいかなる意味においてアレクサンドロスの神格化の「前例」「先駆」であったのか。権力者崇拝の発展における両者それぞれの歴史的意義は何であったのか。(3)マケドニア史全体の文脈において、王の「神格化」という現象はどのように位置づけられるのか。(4)アレクサンドロスの「神格化」に先立つフィリポス2世のそれを検討することは、権力者崇拝の発展の図式についての理解をいかに変えるか。さらに、近年のマケドニア史研究において活発に議論されている、マケドニアへのアケメネス朝ペルシアの影響の再検討、およびマケドニアの王権の性格についての再評価という問題も視野に入れて取り組むことを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1)権力者崇拝という現象を考えるための論点整理

神々と人間との区別を古代ギリシアの人々がどのように認識していたのか、生前の人間に神的崇拝を捧げる行為と世俗的顕彰行為の間にはどれほどの差異があったのか、という古くから議論されてきた問題、および、卓越した人間を死後に英雄（半神）として崇拝するというギリシア世界の英雄崇拝という慣行と神的崇拝との差異や区別について、最新の研究動向を整理・検討した。

### (2)アレクサンドロスの「神格化」をめぐる論点の整理

アレクサンドロスの「神格化」をめぐる多岐にわたる論争においては、アレクサンドロスは自己の神性を信じていたのか、彼自身が自己神化を命じたのか、彼の存命中に神的崇拝は成立した

のか、といった問題や、ヘレニズム時代の君主礼拝との関連など、現在もなお意見の一致を見ないものも多いが、フィリポス2世の「神格化」の考察と関わる論点について整理・検討した。

### (3) フィリポス2世の治世以前のギリシアポリスにおける都市祭祀についての検討

古典期のギリシア世界において生前の人間の礼拝・祭祀と関連づけられる事例は、ハグノン（アンフィポリス）、リュサンドロス（サモス）、アゲシラオス（タソス）、ディオーン（シラクサ）の4例であり、これらの事例を中心に、祭祀の地域偏差や質的差異に留意しながら分析を進めた。

### (4) フィリポス2世以前のマケドニア王の「神格化」を示唆する事例の検討

フィリポス2世以前のマケドニアについては史料が乏しく、王の「神格化」という問題に関しても史料的制約が大きい。わずかながら「神格化」を示唆する史料があるアルケラオス（ピュドナ）とアミュンタス3世（アンフィポリス）の事例について検討した。

### (5) フィリポス2世に捧げられたとされる「都市祭祀」の事例の検討

アンフィポリス、フィリッポイ、フィリッポポリス、エレソス、エフェソス、アテナイの事例を取り上げ、(3)で検討した古典期ギリシアにおける都市祭祀の伝統の文脈においてきめ細かく分析した。権力者崇拜という現象を考えるにあたっては、かつてCh.Habichtが強調したように、都市の側から、すなわち「下から」「自発的」に提起された「都市祭祀(civic cult)」と、支配者や王朝の側から、すなわち「上から」、公的な国家祭儀として体制化された「王朝祭祀(dynastic cult)」を区別する必要がある。フィリポス2世の「神格化」を検討するにあたっては、(5)「下から」の都市祭祀に類する事例と(6)「上から」の王朝祭祀への方向性を含む事例を峻別し、彼はいかなる意味でアレクサンドロスの「神格化」やヘレニズムの君主礼拝の「前例」であったのかを明確にすることが肝要となる。

### (6) フィリポス2世自身の「自己神化」の志向を示唆する事例の検討

最晩年のフィリポス2世が「上から」の権力者崇拜の方向へ進み始めた可能性を示唆する、前336年のアイガイでの祝典行列のエピソードと、彼がカイロネアの勝利後にオリュンピアに建立した円形堂フィリペイオンについて検討した。とりわけフィリペイオンをめぐるのは、円形堂を神殿・英雄廟、現存していない内部の群像を神像・礼拝像と見なし、フィリポス2世が自身と家族を祀る神的祭祀を創始しようとしたと見る見解があるが、この円形堂の意義について重点的に考察した。

### (7) 総括

以上の検討を通して、権力者崇拜の発展におけるフィリポス2世の歴史的意義を明らかにし、マケドニア史の「連続性」、および権力者崇拜の発展の図式と関連づけて考察した。

## 4. 研究成果

(1) アンフィポリス、フィリッポイ、フィリッポポリス、エレソス、エフェソス、アテナイといったギリシア諸都市の事例の検討から、フィリポス2世は自らの築いた都市であるフィリッポイとフィリッポポリスにおいて伝統的な植民市建設者祭祀に類する崇拜を受け、さらに、ギリシアの覇者となった晩年の前338～前336年には、エレソスとエフェソス、そしておそらくはアテナイでも、宗教性を帯びた榮譽を得たことが確かめられる。ギリシア世界において、生前の外部権力者の神的崇拜は、前5世紀末のスパルタの将軍リュサンドロスの事例以降は確認できないが、これらの都市でフィリポス2世に与えられた宗教性を帯びた榮譽は、いずれも明確な神的崇拜ではないにせよ、リュサンドロスの事例に見られる外部権力者への「迎合」としての都市祭祀の流れに、再び大きくはずみをつけたと考えられる。従来の研究では、フィリポス2世が生前に崇拜を受けたことを全面的に否定する論者も多く、権力者崇拜の発展における彼の意義は看過されているが、リュサンドロスからアレクサンドロスへと至る権力者の生前崇拜の発展において、フィリポス2世が果たした役割は決して小さくはなかったと言える。

(2) フィリポス2世はその最晩年、アイガイでの祝典行列において、自身の像を12神の像とともに牽かせ、自らを神々の加護を一身に受ける、神と肩を並べる卓越した存在として印象づけた。また、オリュンピアの神域に造営した円形堂フィリペイオンでは、あたかも神像のような造りのマケドニア王家の群像を安置し、自らの神性をほのめかしつつ、自身が神に近い存在であることを喧伝した。その直後のフィリポス2世の暗殺により、彼の計画は明らかではないが、少なくとも、この祝典行列とフィリペイオンには、自身を神のごとき存在として広くギリシア世界に向けて印象づけようとした彼の意図を見出すことができる。近年の研究では、アレクサンドロスのみならずフィリポス2世も「自己演出」の達人だったことがとみに強調されているが、ギリシアの覇者となったフィリポス2世は、ペルシア遠征という次なる計画を前に、自らの超越的な權威をこのようにして効果的に演出したと考えられる。また、自らを含む家族の群像をフィリペイオン

に安置したことに見られるように、パンヘレニックな神域であるオリュンピアにおいて自身のみならず王家そのものを宗教的な枠組みに置き、神的崇拝につながるようなコンテクストに位置づけることによって、ヘレニズム時代に開花する王朝祭祀への道筋を示したと結論できる。

(3) フィリポス2世の「神格化」をめぐるこれらの分析を踏まえて、権力者崇拝の発展のプロセスにおけるフィリポス2世とアレクサンドロスのそれぞれの歴史的意義についても考察を試みた。フィリポス2世は、(1)で述べたように、マケドニアをギリシア世界の「超大国」へと押し上げることによって、外部権力者への「迎合」としての都市祭祀の流れに大きくはずみをつけた。さらに、(2)で述べたように、自身のみならず王家そのものを宗教的なコンテクストに位置づけることにより、ヘレニズム時代の「上から」の王朝祭祀へと発展していく道筋を示した。これに対してアレクサンドロスの場合は、その前人未到の大征服と早すぎる死ゆえに彼の名声や威信が巨大化したことによって、彼の絶大な威信を頼りに後継武将たちが激しい争いを繰り広げていくなかで、彼の神性が都市やヘレニズム王朝の権威の拠り所になったということに、権力者崇拝の発展における彼の意義があると考えられる。亡き王を神として崇拝し、その後、生前の王の神格化へと発展し、王朝の超越的権威を裏づけるための公的な国家祭儀としてシステム化されていったヘレニズム時代の王朝祭祀は、こうしたアレクサンドロスの死後崇拝の延長線上にある。権力者崇拝の発展において、フィリポス2世はアレクサンドロスの単なる「前例」や「先駆」ではなく、両者がそれぞれに、その発展に大きく貢献したと考えることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 澤田典子	4. 巻 67
2. 論文標題 ギリシア世界における権力者崇拜（1）：ブラシダス、リュサンドロス、フィリポス2世	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 303-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 澤田典子	4. 巻 68
2. 論文標題 ギリシア世界における権力者崇拜（2）：フィリポス2世からアレクサンドロスへ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 247-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 澤田典子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 235
3. 書名 アレクサンドロス大王	

1. 著者名 Q.E. Wang, M. Okamoto & L. Longguo eds.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 645
3. 書名 Western Historiography in Asia: Circulation, Critique and Comparison	

1. 著者名 周藤芳幸編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 -
3. 書名 古代地中海世界と文化的記憶	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------